

会話における順番交替の手続き

林 誠

名古屋大学

1. はじめに

人は日常のさまざまな活動を、他者と言葉をやりとりすることを通じて行っている。家族と食卓で話したり、会社で取引先と商談をしたり、かかりつけの医師に体調の不良を訴えたりなど、日々のあらゆる場面で我々は他者と言葉を交わしており、それは人間の社会生活の基盤をなしている。ゆえに、人々が言葉のやりとりをどのように行っているかを精査することは、「社会」がどのように成り立っているかを解明する一つの手だてを提供してくれる。サックスら (Sacks, et al. 1974= 2010) はそのような観点から、日常の会話がその参与者たちによってどのように秩序だった形で組織されているかを、特に話者が交替するプロセスに注目して記述した。サックスらによれば、会話の参与者が発話の順番を交替するプロセスには秩序だった手続きが存在し、参与者たちはそうした手続きをその場その場の状況に合わせて用いることで、会話という活動を成り立たせている。本章では、会話における順番交替の仕組みを解説する。順番交替が存在するいかなる社会的活動においてもそうであるように、「順番」は社会的活動に参加するための限られた機会であり、価値があるものとしてみなされる。会話における発話の順番も同様である。発話順番は社会参加の機会であり、その分配の手続きは、価値あるものに対して参与者たちが示す規範的志向性にもとづいて組織される。言い換えれば、発話順番の分配の手続きとは、単に何らかの統計的結果から導き出された言語使用の形式的パターンの記述ではなく、会話の中で参与者が自らと他者の行動を調整するために参照し、用いている規範的装置なのである。

2. 順番交替の手続き

会話の参与者はいかにして発話順番を獲得し「話者」となるのか。いうまでもなく、会話の途中の好き勝手な時点で話し始めることで「話者」となるわけではない。ある参与者が適切な方法で「次」の話者になるためのいくつかの手続きが存在する。それらの手続きをサックスらは以下のようにまとめた (Sacks, et al. 1974= 2010)。

(1) 産出中の発話順番が最初の「順番が代わってもよい場所」に至ったとき

(a) もしそこまでに現在の話者が次の話者を選択していれば、選択された人が次の話者となる権利と義務を持ち、そこで話者交替が起こる。

(b) もしそこまでに現在の話者が次の話者を選択していなければ、現在の話者以外の人がある話者として自己を選択してよい。その場合には、最初に話し始めた人が次の話者となる権利を得て、そこで話者交替が起こる。

(c) もしそこまでに現在の話者が次の話者を選択しておらず、また現在の話者以外の誰も自分から次の話者として自己を選択していなければ、現在の話者が話し続けてよい。

(2) 最初の「順番が代わってもよい場所」で 1a も 1b も適用されず、1c によって現在の話者が話し続けたならば、次の「順番が代わってもよい場所」で再び上記の a-c が適用される。これは順番交替が起こるまで繰り返される。

このように定式化された順番交替の手続きが実際にどのように運用されるのかを参与者自身が理解するためには、以下の3つの事柄を特定できなければならない。まず1つ目は、産出中の発話順番がいつ「順番が代わってもよい場所」（これを「移行適切場（transition relevance place; TRP）」と呼ぶ）に到達するのかを特定できなければならない。なぜなら、上の手続きはすべて TRP で運用されるからである。2つ目は、現在の話者が自分以外の参与者を次の話者として選択する方法を特定できなければならない。これは（1a）の運用のために必要である。3つ目は、参与者が自らを次の話者として選択する方法を特定できなければならない。これは（1b）と（1c）の運用のために必要である。

これら3つの事柄のうち、1つ目は発話順番の「組み立て」にかかわる。なぜなら、発話順番がいつ TRP に達するかを知るには、リアルタイムで一語一語産出されていく発話順番が、言語的（および非言語的）にどのような構成をもって構築されるかが大きな鍵となるからである。2つ目と3つ目は、発話順番の「割り当て」にかかわる。割り当ての手続きは、参与者間での発話機会の分配に中心的な役割を果たす。以下、発話順番の「組み立て」と「割り当て」の側面をそれぞれデータに即して解説していこう。

3. 発話順番の組み立て

ある参与者の発話順番が、次の話者へと順番が代わってもよい場所に到達するという事は、すなわちその発話順番が「完了」してもよい場所に達するという

ことである。発話順番が完了してもよい場所（これを「完了可能点（possible completion point）」と呼ぶ）に到達したかどうかの判断にはさまざまな要因がかかるが、1つにはその発話順番が統語的に完了していると思わせるか、もう1つにはその発話順番がイントネーションの観点から完了していると思わせるか、さらにもう1つには行為の遂行という観点から完了していると思わせるか、という、少なくとも3つの要因が関連する（Ford and Thompson, 1996）。例えば、断片（3）の01-02行目の発話順番は、その末尾（「...ですか:？」）において、統語構造（終助詞「か」で終わる疑問文）の点でも、イントネーション（上昇調）の上でも、遂行している行為（質問）の観点からも完了可能点に到達していると思なすことができる。そして実際、その場所で聞き手が話し始めている（03行目）。

(3) [TYC]

- 01 マサル: ユリエさんって前 (まで,) ケミカにいた山田さん: っ人
02 知らない: ですか: ?=
03 ユリエ: =知ってま:: す.

この断片に見られるように、統語構造、イントネーション、行為のすべての側面において完了していると思なしうる場所において順番交替が起こることが最も普通であるが（Ford and Thompson, 1996; Tanaka, 1999）、ときには、これらのうちのある側面に関しては完了していると思なされない場所が完了可能点と扱われ、順番交替が起こることもある。次の断片を見てみよう。

(4) [KNZ] ((マサルとケイコは翌日のプランを立てている))

- 01 マサル: あ! ゆう立ちが- (.) けっ k- 来るみたいよ [あした.]=
02 -> ケイコ: [う::ん.] =

01行目の発話の後半部分「来るみたいよあした。」はひと息に発話され、1つのイントネーション曲線を形成しており、「来るみたいよ」が産出された時点では、イントネーション上は完了しているようには聞こえない。しかしながら、ケイコは「来るみたいよ」が産出された時点でマサルの発話順番が完了可能点に達したと思なし、その場所でマサルが提供した情報の受け取りの発話を開始している（02行目）。「ゆう立ちが- (.) けっ k- 来るみたいよ」は統語的に完了していると思なしうる発話であり、行為（ケイコへの情報提供）の観点からも完了して

いると見なしうる。この例では、イントネーション上は完了点とは言えないながらも、統語構造・行為の点で完了可能と見なしうる場所で順番交替がなされている。

次の英語の例では、統語的にもイントネーション上も完了していると思えない発話が、完了した TCU として聞き手に扱われている。

(5) [Lerner 2004: 163] ((03 行目の下線は平板イントネーションを示す))

```
01 Therapist: What kind of work do you do?
02 Mother: on food service
03 -> Therapist: At_
04 -> Mother: uh post office cafeteria downtown main
05 office on Redwood
```

03 行目の *At_* は統語的に完了した発話ではなく、イントネーションも平板で継続を示唆するものである。しかしながら、まさにこの統語的・音調的に未完了であるという性質を利用して、相手に続きを促すという行為を遂行しており、行為の観点からは完了可能と見なしうる発話順番を形成している。

Tanaka (1999)によれば、断片 (4) (5) のように、統語・イントネーション・行為の3つの観点からの完了可能性が一致しない場所で順番交替が起こった場合、聞き手がもっとも志向するのは「行為」の観点からの完了可能点である。つまり、「順番が代わってもよい場所」とは、発話がある行為を遂行するものとして完了したと見なしうる地点と理解することができる¹。そして重要なのは、どのような組み立てを持つ発話が「ある行為を遂行するものとして完了したと見なしうる」TCUを形成するのには、その発話が埋め込まれたその場その場の状況を考慮せずに判断することはできない、という点である。断片 (5) が示すように、ときには「一語」の発話が完了した TCU と見なされることもあれば、断片 (3) の 01-02 行目のように「文」の形態を持つものもある。また、「句」(例: 「9時から」) や「節」(例: 「もしできましたら」) などの形態を持つ発話が TCU となることもある。つまり、TRP の特定は何らかの抽象的な基準のみを用いて行えることではなく、常に発話の組み立てとその発話が埋め込まれた相互行為の

¹ このように言うことは、参加者が統語構造やイントネーション上の完了可能点に志向しないということの意味しない。行為の観点からの完了可能点は、非常に高い割合で統語上・イントネーション上の完了可能点と一致する。つまり、行為の遂行上完了したと見なされる発話は、統語的にもイントネーション上でも完了したと見なしうる構成をもって産出される場合が圧倒的に多い。

詳細とを参照して行われる²。

4. 発話順番の割り当て

次に、発話順番の割り当ての手続きを検討しよう。上で述べた通り、発話順番の割り当てには、「現在の話者が自分以外の参加者を次の話者として選択する手続き」と「参加者が自らを次の話者として選択する手続き」の2種類がある。便宜上、前者を「他者選択」の手続き、後者を「自己選択」の手続きと呼び、それぞれ4.1、4.2で記述する。

4.1 他者選択の手続き

他者選択の基本的な手続きは、次の2つの手続きを組み合わせたものである (Sacks, et al., 1974=2010)。

- (a) 隣接対の第一成分（質問など；第○章参照）を産出する。
- (b) 発話順番を次話者として選択する参加者に宛てる。

この2つの手続きが組み合わせて用いられた発話順番の例として、断片（3）のマサルの発話順番（「ユリエさんって前（まで、）ケミカにいた山田さん:って人知らない:ですか:？」）が挙げられる。この発話順番は質問として組み立てられ、自分以外の特定の参加者（＝ユリエ）に宛てられている。

他者選択が適切に行われるためには、(a)と(b)の両方の手続きが用いられることが重要である。なぜなら、たとえ隣接対の第一成分が産出されても、それが特定の参加者に宛てられていなければ（例えば、数人の参加者に向かって「誰か昨日、月9のドラマ見た？」と質問するような場合）、次にどの参加者が順番を取る権利と義務を持つかが明確にならない。また、発話順番が特定の参加者に宛てられていても、それが隣接対の第一成分のように相手の反応を求めるものでなければ（例えば、断片（6）の03行目のように）、次の話者が選択されたことにはならない。

² 会話のデータを見ればわかるが、大多数の場合、順番交替は発話の重なりもなく、間が空くこともなく、極めて精確なタイミングで行われる。この事実は、産出中の発話がいづ TRP に到達するかを、実際に TRP に到達する以前に聞き手が予測できているということを示唆する。こうした TRP の予測可能性 (projectability) は、発話の統語構造、イントネーション、発話が埋め込まれている連鎖環境、共起する身体動作など、さまざまな要素によって提供される (Tanaka, 1999; Hayashi, 2003)。

(6) [TYC] ((ケンが、ユリエとの共通の知り合いの下の名前が「タケル」であることを述べた直後))

01 ユリエ: あ タケルさんってゆうの.

02 (0.2)

03 -> ケン: そうそう.

04 (0.6)

05 シホ: これ手でして、いいですか:。(手元のケーキについての発言))

03 行目のケンの発話は 01 行目のユリエの確認要求への応答であり、ユリエに宛てられている。しかし、「そうそう。」は隣接対の第一成分のように相手の反応を求めるものではなく、次話者を選択しない。

隣接対の第一成分がどのようなリソースを用いて組み立てられるかは行為の構成に関わる問題であり、本章の紙幅では十全に扱うことはできないので、関心のある読者は串田・平本・林（近刊）第2章および串田（近刊）を参照されたい。以下では、発話を自分以外の特定の参加者に宛てる手続きに焦点を当てて記述を進める。

4.1.1 発話を特定の参加者に宛てる手続き

発話を自分以外の特定の参加者に宛てるために使われる手続きには、大きく分けて2種類ある。1つは明示的に発話を聞き手に宛てる方法であり、もう1つは非明示的に宛てる方法である。前者の方法には、(i) 視線を次話者に向けること、と(ii) 次話者への呼びかけ語（名前、肩書きなど）を用いること、が含まれる（Sacks, et al., 1974=2010）。断片(3)の「ユリエさんって前(まで,)ケミカにいた山田さん:って人知らない:ですか:?’では、次話者として選択された参加者の名前（ユリエ）が用いられ³、また発話末で話者の視線がユリエに向けられており、上記の(i)と(ii)の両方が用いられているケースである。これらの手続きは、個々の文脈を超えて一般的に利用可能な手続きである。

これらの明示的な方法以外に、個々の状況に特有のさまざまなリソース（発話

³ 厳密に言えば、ユリエの名前は「って」を伴って提示され、文構造の一部として産出されている点で、「呼びかけ語（address term）」としてではなく、「二人称指示（second person reference; 英語の you に相当するもの）」として用いられている。英語などの言語と異なり、日本語では名前や肩書きなどの表現が二人称指示語として用いられることがしばしばある。そして、上の事例で見られるように、そうした二人称指示語が呼びかけ語と同様に他者選択の際の宛て先表現として使われる。

内容、発話の置かれた連鎖上の位置、参加者のアイデンティティなど)を利用して発話を特定の参加者に宛てる、非明示的な方法がある。次の断片を見てみよう。ここでは、最近結婚式を挙げたケンとユリエの家をマサキとシホの夫婦が訪れている。以下の断片のやりとりの間、シホはずっと手元のウェディング情報誌のページに目を落としている。

(7) [TYC]

- 01 -> シホ: ドレスとか:迷いましたか:?
02 (1.0)
03 ユリエ: う::ん. やっぱ迷いましたね::.

01 行目のシホの質問は呼びかけ語を伴っておらず、視線も手元の情報誌に向けられている。しかし、聞き手(ユリエ、ケン、マサキ)の中でウェディングドレスの選択を迷った経験を持つのはユリエのみと考えられる状況においては、この質問はユリエに宛てられたものと理解され、実際ユリエもそうした理解のもとに応答を行っている⁴。このように、発話を宛てる明示的な手続きが取られていない場合でも、個々の発話状況に存在するリソースを利用して特定の参加者に発話を宛てることが可能となる。

4.2 自己選択の手続き

現在産出中の発話順番が TRP に到達するまでに他者選択の手続きが取られなかった場合、現在の話者以外の参加者が自己選択により次の話者となる可能性が立ち上がる(順番交替手続きの 1b)。現在の話者以外が自己選択する場合には、最初に話し始めた参加者が次の話者となる権利を得るため、次話者になろうとする者はできるだけ早く話し始めることを動機付けられる。この動機付けにより、現在の発話順番が TRP に到達する少し前から自己選択した話者が話し始めるという現象がしばしば見られる。その結果、発話順番末での発話の重なりが系統的に観察される。この重なりを「発話末での重なり terminal overlap」(Jefferson 1984)と呼ぶ。次の断片では、01 行目のヨウコの発話順番が TRP に到達する直前にマリが話し始め、発話末での重なりが起こっている。

⁴ ここでは「です/ます体」の使用も発話を宛てる手続きに一役買っている。シホは一貫してユリエとケンにはです/ます体で話し、自分の夫であるマサキには「だ体」で話している。この事実から、01 行目の質問をです/ます体で組み立てることによって、マサキを次話者の候補から除外することを行っている。

(8) [OBS] ((中高生の子供を持つ母親たちが、今の若者の間で流行っているファッションは自分たちの若いときのスタイルと同じだと話している))

01 ヨウコ: いまの形とまったくおん[なじ.]

02 -> マリ: [おん]な[じよ襟も.((ヨウコに向けて))

03 エミ: [あ!ほんとう:.((ヨウコに
向けて))

他者選択の手続き (1a) が取られていない発話順番の TRP において、そこまでの話者が話し続けようとする場合 (1c)、他の参加者が自己選択で話し始める可能性 (1b) と競合することになる。それに対処する一つの方法は、予測される TRP の前後で発話のスピードを上げる「駆け抜け rush-through」(Schegloff, 1981) の手続きを用いることである。次の断片を見てみよう。

(9) [TYC]

01 シホ: なんぶんかかります?:?自転車で.

02 -> マリ: 自て:ん車で::じゅう:二三ぶん::::>ですねあの:<自転車置き場

03 に行って::>行ったり<とか[してる時間も入れて.

04 シホ: [あ::::::::::

マリの発話順番は、「自て:ん車で::じゅう:二三ぶん::::>ですね」まで産出された時点で統語的にも行為 (質問への応答) の観点からも完了可能となり、そこで他の参加者が自己選択で順番を取る可能性が生じる。しかし、マリは完了可能点に到達する直前から発話のスピードを上げ、「ですねあの:」をひと続きのものに聞こえるように産出することで、完了可能点を「駆け抜け」て自らの発話を続けている。

5. まとめ

この章では、会話における順番交替の手続きを、発話順番の「組み立て」および「割り当て」の観点から概説した。本章の記述は基本的に英語会話のデータをもとにしたサックスらの研究に基づいているが、こうした記述がどの程度日本語 (あるいはその他の言語) にも当てはまり、どの程度個別言語による相違が存在するのかに関しては今後の研究によって明らかにされなければならない (そうし

た研究の一例として Tanaka, 1999 参照)。例えば、発話順番の構築の方法に関して、日本語では一つの順番構成単位を構築する過程で、聞き手の反応を促しながら漸次的に発話を組み立てていくことが報告されている (Fox, et al, 1996; Tanaka, 1999; 西阪 2008)。このような発話構築の方法は英語ではあまり観察されないが、こうした違い、あるいはその他の言語間相違が順番交替の組織にどのような影響を及ぼすかを精査することは、相互行為と言語の関係を理解する上で重要な知見を提供することになるだろう。

参考文献

- Ford, Cecilia, and Sandra Thompson, 1996, "Interactional units in conversation: Syntactic, intonational, and pragmatic resources for the projection of turn completion," Elinor Ochs, Emanuel Schegloff, and Sandra Thompson eds., *Interaction and Grammar*, Cambridge: Cambridge University Press, 134-184.
- Fox, Barbara, Makoto Hayashi, and Robert Jasperson, 1996, "Resource and repair: A cross-linguistic study of syntax and repair," Elinor Ochs, Emanuel Schegloff, and Sandra Thompson eds., *Interaction and Grammar*, Cambridge: Cambridge University Press, 185-237
- Hayashi, Makoto, 2003, *Joint Utterance Construction in Japanese Conversation*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Jefferson, Gail, 1984, "Notes on some orderlinesses of overlap onset," V. D'Urso and P. Leonardi eds., *Discourse analysis and natural rhetoric*, Padua, Italy: Cleup Editore, 11-38.
- 串田秀也, 近刊, 「行為の構成と発話デザイン」平本毅・増田将伸・横森大輔・城綾実・戸江哲理編『会話分析の広がり』ひつじ書房.
- 串田秀也・平本毅・林誠, 近刊, 『会話分析入門』勁草書房.
- Lerner, Gene, 2004, "On the place of linguistic resources in the organization of talk-in-interaction: Grammar as action in prompting a speaker to elaborate," *Research on Language and Social Interaction*, 37(2): 151-184.
- 西阪仰, 2008, 「発言順番内において分散する文: 相互行為の焦点としての反応機会」『社会言語科学』10(2): 83-95.
- Sacks, Harvey, Emanuel Schegloff, and Gail Jefferson, 1974=2010, "A simplest systematic for the organization of turn-taking for conversation," *Language* 50(4): 696-735, (=2010, 西阪仰訳, 「会話のための順番交替の組織—最も単純な体系的記述」『会話分析基本論集—順番交替と修復の組織』世界思想社, 7-

- Schegloff, Emanuel, 1981, "Discourse as an interactional achievement: Some uses of 'uh huh' and other things that come between sentences," Deborah Tannen ed., *Georgetown University Roundtable on Languages and Linguistics 1981: Analyzing Discourse; Analyzing Discourse: Text and Talk*, Georgetown: Georgetown University Press, 71-93.
- Tanaka, Hiroko, 1999, *Turn-Taking in Japanese Conversation: A Study in Grammar and Interaction*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.